愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第9号, pp. 53～ 60 (February, 2006)

キミ子方式と小学生

― 岡崎市立常磐南小学校におけるクロッキーの実践 ―

松 本 昭 彦 (愛知教育大学美術教育講座)

(2005年10月28日受理)

KIMIKO Method and School Children

― Practice of Sketches in Okazaki City Tokiwa Minami Elementary School ―

Akihiko MATSUMOTO (Department of Visual Art, Aichi University of Education)

要約 本年7月，キミ子方式のペン画の描き方を岡崎市立常磐南小学校の9名の教諭たちに体験してもらった。その後の教諭たちに指導された児童らの作品や感想文から判断すると，描き方について具体的な指示のあるキミ子方式は，観察力と描写力の向上だけでなく，人間性の成長にも効果があったと思われる。教師が変われば子どもらも変わると言えよう。それゆえ教える側の教師が学ぶことは，教育を改善していくための原動力になるものと考える。

Keywords：キミ子方式，ペン画，教師と児童

はじめに

岡崎市立常磐(ときわ)南小学校の「児童へのクロッキー指導法」をテーマとする現職教育で，筆者を講師として9名の教諭たちにキミ子方式のペン画の描き方を体験してもらった。

キミ子方式のペン画というのは，この描き方の考案者である松本キミ子によれば，

> 描きはじめの一点が決まれば，あとは，となりとなりと描いていくだけです。描きはじめの一点がきまれば，終わったようなものです。

と，そっけない。しかし，

> 私の目の前に，「絵を描きたいけど描けない」という人がいて，紙とペンと時間が20分ほどある。その時どうするか？……そういう単純な要求から出発した絵の描き方です[1]。

という部分は，岡崎市立常磐南小学校（以下，常磐南小と略す）の教諭たちが求めている指導法として，ふさわしいもののように筆者には思われた。

本稿は，筆者の指導による教諭たちのクロッキー作品と制作後の感想文，及びその後の教諭たちによって指導された児童らのクロッキー作品と感想文を通して，キミ子方式が常磐南小の児童らにどのような影響を与えたのか，さらに教員自身が学ぶことの意義とは何かについて考察を試みるものである。

1．キミ子方式とクロッキー

まず，クロッキーという用語の字義を『広辞苑』で引くと「〔croquisフランス〕短時間でする写生。速写。英語のスケッチに相当する語。わが国では写生をスケッチ，略画・速写画をクロッキーという。」とある。モノを実際に見ながら短時間で描くことなのだろうが，この字義では道具については一言も触れていないので，ペンを使用してクロッキーを描くことに問題はなさそうである[2]。松本キミ子の場合，

> ペン一本で描く絵に，カット，イラスト，スケッチ，デッサン，などの言葉がありますが，その区別が私にはよくわかりません。（中略）
> ペン一本で描くので，ペン画といってしまいましょう[3]。

と，いたってシンプルである。松本キミ子の解釈では，ペン一本で描きさえすれば，比較的短時間で描くクロッキーであってもペン画と呼んで差し支えないことになる。

一般的に，キミ子方式といえば「どんな色も，赤・青・黄の三原色と白だけをまぜて，自分の色をつくる」「描きはじめの一点から，となりとなりへと描きひろげていく」「画用紙が足らなくなったら，足す。あまれば切ればいい。構図は描いたあとで，考える」という水彩画における3つの約束事の方が有名であろう[4]。ペン画の描き方というのは，キミ子方式の水彩画を経験した人たちからの要望によって，あとから考え出されたものであり，その経緯については以下のような記述を見ることができる。

> そうして「描く楽しみ」を知ってしまった人たちの中から「チョコチョコッとペンだけで描ける方法を知りたい」という声があがるようになりました。（中略）ペンだけで，一点から隣り隣りへと描き，縮小コピーして文章のカットに入れたり，自分の便せんを作ったりしたら楽しいかもしれない……。そうして，「カットの描き方」が生まれたのです。
> 一方，「スケッチをしたいので教えてほしい」と

いう要求も出てきました。「スケッチブックを持って旅にでて，スケッチができたらステキ」というわけです。（中略）小さなスケッチブックに，ペン一本で，カットの描き方のように旅の思い出を記録するしかないと気づきました。（中略）ためしに「小さなスケッチブックの中に描く会」を持ってみたのですが，そこで描かれた絵はまさに「スケッチ」でした。
そのうちに，「イカ」や「サンマ」を絵の具でじっくり描いた経験のある人たちが，いろいろのものをペン一本で描きだしたのです。一点からとなりへとなりへ。これはスケッチというよりもデッサンにちかいでしょう。新しい言葉が必要ですが，今は「ペン画」としかいえません[5]。

とある。

常磐南小のこれまでのクロッキー実践では，マーカーやコンテ，ときおり鉛筆などを用いて描かせてきたようである。キミ子方式では「鉛筆などの『消せる道具』は真剣さを失わせ」る，と考えているので，鉛筆を使うことはめったにない[6]。例外は「タワシ」「ホウキ」「髪の毛」「似顔絵」などの題材のほか[7]，工場で生産されるような人工物，例えば「ブリキのバケツ」や「ワインのビン」などを水彩で描くための輪郭くらいである[8]。

2．教諭たちのクロッキー

常磐南小におけるクロッキーの実践の歴史は，今年で15年ほどになるらしい。当時の校長が美術の教員免許を持つ人だったらしく，彼が提唱して始まったと聞いている。

今回の現職教育にも現校長の参加があった。なお，現職教育で使用した道具やモデルについては，事前に筆者が常磐南小に宛てたメールから理解していただけると思うので，送信内容をそのまま引用する。

お世話になります。
7月２６日の件ですが、
ご用意いただくものの連絡をさせていただきます。
【道具・材料】
- **八つ切画用紙（１人８枚）**
- **墨汁（全員で１本）**
- **空きカップ（墨汁を入れるものならプリンの容器でも何でも良い。１人１個）**
- **割り箸（１人１本）**
- **ボールペン黒（１人１本）**

【モデル】
- **枯葉（枯れていなくても良いが、桜の葉っぱのように幅があるもの）**
- **顔（小さな鏡をご持参ください）**
- **雑草（当日午後、バケツに必要分入れておいてください）※花のあるものがお勧め…ヒメジオンなど。**
- **亀の子タワシ※松本が５つ用意します。ローテーションで使いましょう。ご用意いただく必要ありません。**
- **巻き寿司（または、にぎり寿司）※1人ひとつで良いです。**
- **森永チョイス（または森永マリービスケット）１人１枚で良いです。**
- **洗濯バサミ**
- **そのほか描いてみたいものがあれば各自でご用意ください。**
  例）マッチ箱、爪きり、外国のコイン、全身像、鶏、切手、ひも靴…

現職教育の当日，実際に絵を描いてもらったのは，時間的な制約もあり，枯葉・洗濯バサミ・チョイス・巻き寿司，及び雑草またはタワシの５題材である。ひとつの題材ごとに，キミ子方式の特徴である「描き始めの一点」と，描き進め方について説明をした後，およそ15分程度で描いてもらった。

枯葉と洗濯バサミについては，割り箸の先端を削ったり尖らせたりせずに，そのまま墨汁につけながら描くように指示をした。それ以外のモデルは，ボールペンによるクロッキーである（次頁図１参照）。以下は，教諭たちの制作後の感想文である。

- 描き始めるところがはっきわかることで次に何をすればよいかがよくわかり，順次描くことができた。／自分でイメージしていたものより，形や線がしっかりとでき上がっており，自分自身に驚いた。
- 絵を描くときに，まず構図からという意識でいたのが，一点からとなりとなりと描いていくということを教えてもらい，気が楽になったというか，大変参考になりました。／うまく描こうという気持ちが先に出てしまうが，あるがままに描くということが大事であると感じました。
- 一点をまず決めて，その周囲から徐々に始めていく（描いていく）方法はとてもわかりやすく描きやすいと思いました。／しかし，描く対象物の成り立ち等をさらに一層学習しないといけないと改めて思いました。
- 今日，全く目新しいやり方で絵を少し描いてみて「自信」なんかはもちろんつかないですけれども家に帰ったら，何か描いてみようかなあ，という気持ちがめばえてきました。／身近な所で，一週間に一度でもこんなチャンスがあったら，没頭してみたいな，とも感じました。絵は上手くないけれども，こんな風にのめり込む時間は，とっても好きです。
- 私自身，以前から絵に対する苦手意識がとても強くありました。子どもに指導するときも「よく見て描こう！」と具体的な指導はできずにいました。／今

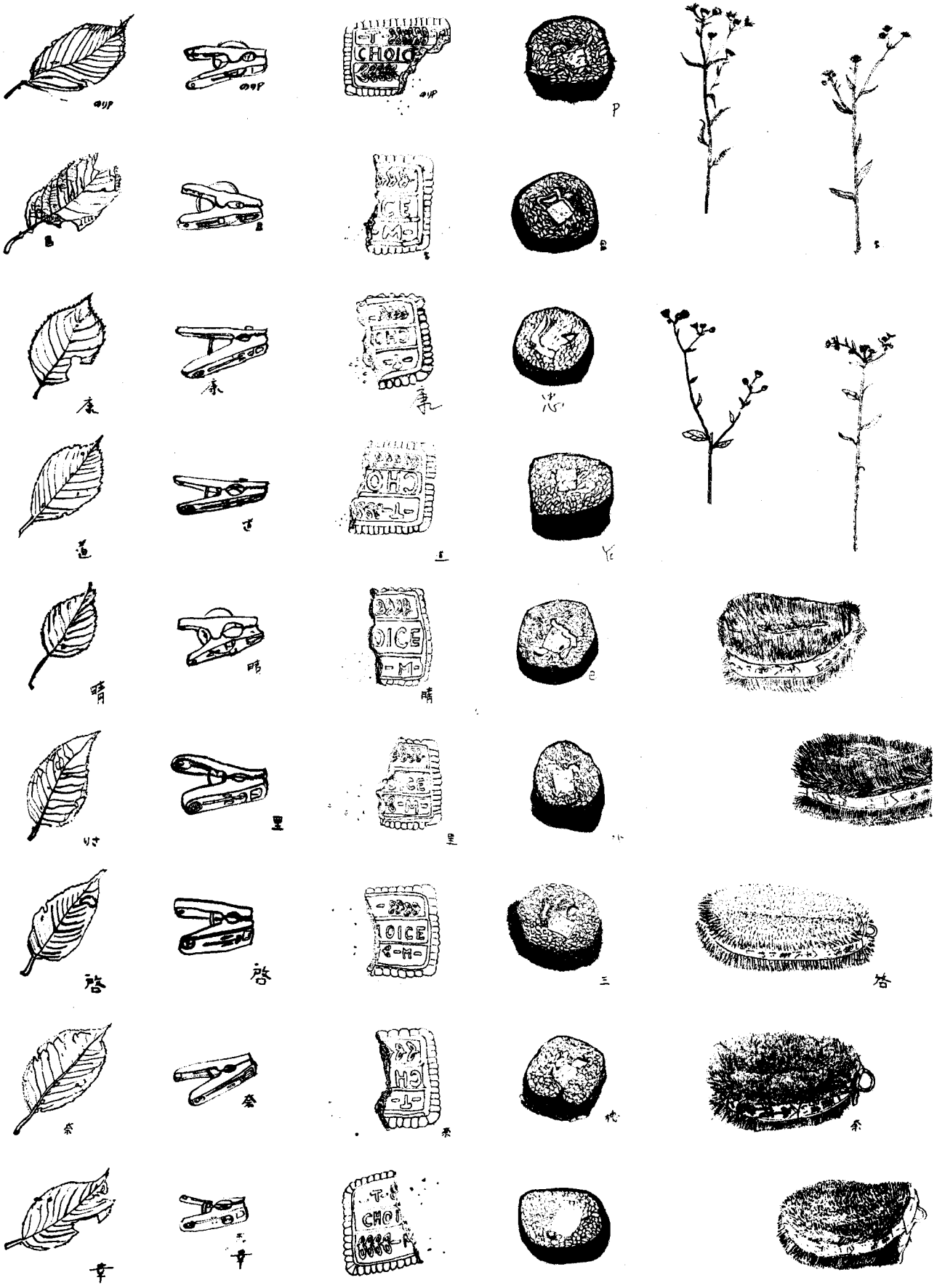

図１　教諭たちのクロッキー

図2　児童のクロッキーの変化（3年）　※それぞれの右側がキミ子方式

日は先生が描きはじめの場所や点や線で描くところ，順序など具体的に指導をして下さったので，すんなり絵を描くことに入っていけました。子どもたちにもそのような指導が必要だと感じました。／今まで，りんかくをまず描くと思っていたので，今日のような描き方はとても新鮮でしたし，「あっ結構描けるのかな。」と思えました。／自分でももっと勉強して，実践していきたいと思います。

- 絵はどちらかと言えば好きな方ですが，今までは，自分の思った様に感じた様に描いても，なっとくのいく絵をかけませんでした。／絵を描くにも，技や方法があるんだと思いました。／最後にたわしを描いて，そのまま描きたくて，密集しているところをたくさんの点や線で描こうとすると，色が濃くなってしまいました。毛は密集していなくても，影になっている様なところは，目には見えていなくても，点や線を描き加えなければならなくなり，少し矛盾を感じました。／絵は奥が深くてとてもおもしろかったです。たわしの毛一本一本に人生が観えた気がしました。
- 絵を描く事によって，自分の性格が出てきて，はずかしい思いがしました。けれども絵を上手に描く事ができる様になれたらと思い，参加させていただきました。
- 絵も描く順序がはっきりあるということ目からウロコです。子供に好きな所から描き始めなさいと話していますが，こんな風に描かせた事は無かったです。／子供の絵（不得手な子）はどうしてもりんかくから描こうとするので小さくなると思いました。／植物は伸びていく方向に向かってとか，自然の成り立ちのままに描けばいいと分かりました。
- クロッキーの「よく見て描くこと」だけでなく，指導のポイントがいろいろあることが勉強になりました。／それぞれの子どもの描く絵の良さを認めていくことも，もっとしていきたい。／子ども達が楽しんで絵を描いていけるように言葉をかけていきたい。／今日の素材のいろいろが参考になり，久しぶりに絵を描く時間が持てて楽しかった。

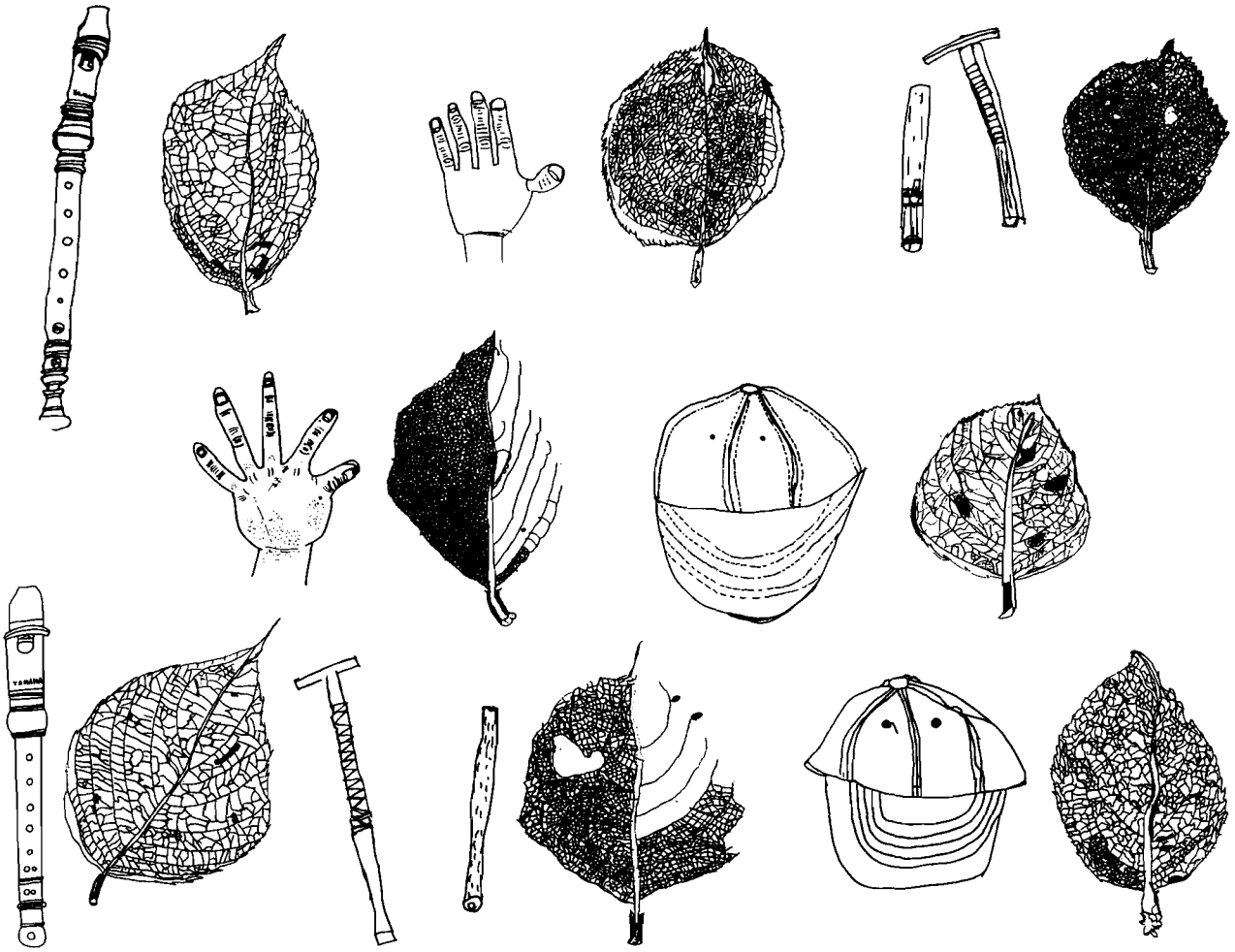

図３　児童のクロッキーの変化（４年）　※それぞれの右側がキミ子方式

３．児童たちのクロッキー

常磐南小の児童の数は１年が５人（男児３，女児２），２年が６人（男児３，女児３），３年が９人（男児６，女児３），４年が８人（男児１，女児７），５年が11人（男児７，女児４），６年が９人（男児３，女児６）で，総計48人（男児23，女児25）である。

教諭たちがキミ子方式のペン画の描き方を知る前と後に描かせた3，4，5年の児童たちのクロッキーを図３～５に載せた。同一モチーフでの比較ではないが，以前の作品（左）に比べると，観察力と描写力の向上が認められる（右）。

以前の作品には，「子どもらしい無邪気な可愛らしさ」が感じられ，清潔で素朴な印象をわれわれ大人に与えてくれる。しかし大人にとって重要な判断をしなければならないのは，いつまで「子どもらしさ」を子どもたちに要求するのか，についてであろう。子どもたちは決していつまでも子どもであることに満足してはいないのである。

常磐南小３年の児童たちはキミ子方式のクロッキー（ペン画）について次のように感想を述べている。

- さいしょは，めんどくさかったけど，おかしとか，さくらのはっぱをかいてたら，どんどんおもしろくなってきたよ。先生も「うまいね。」とか「こまかいね。」とか，ほめてくれたからとってもうれしかったよ。こんどのずこうもやりたいと思ったよ。「じょうず。」とか「すごい。」とかいっぱいほめてもらうようにがんばるよ。
- りったいてきに書くのがむずかしかった。いちょうとおかしとさくらの葉を書いた。「うまい。」と言われた。光くんもうまかった。先生も「りったいてきでほんものそっくり。」と言ってくれた。絵をうまくかけてよかったと思いました。

キミ子方式のペン画の描き方には，描き始めと進め方にルールがあるので，それを難しいと受け取られてしまうこともあるのは否めないが，そういうハードルを越えたところに学習の喜びがあるのではないだろうか。感想の中で，児童が他の児童の作品の良さを認めているところにとりわけ注目したい。

- １，２，３番とやってかくことがすごくわかりました。だいぶじょうずになってきたと思いました。

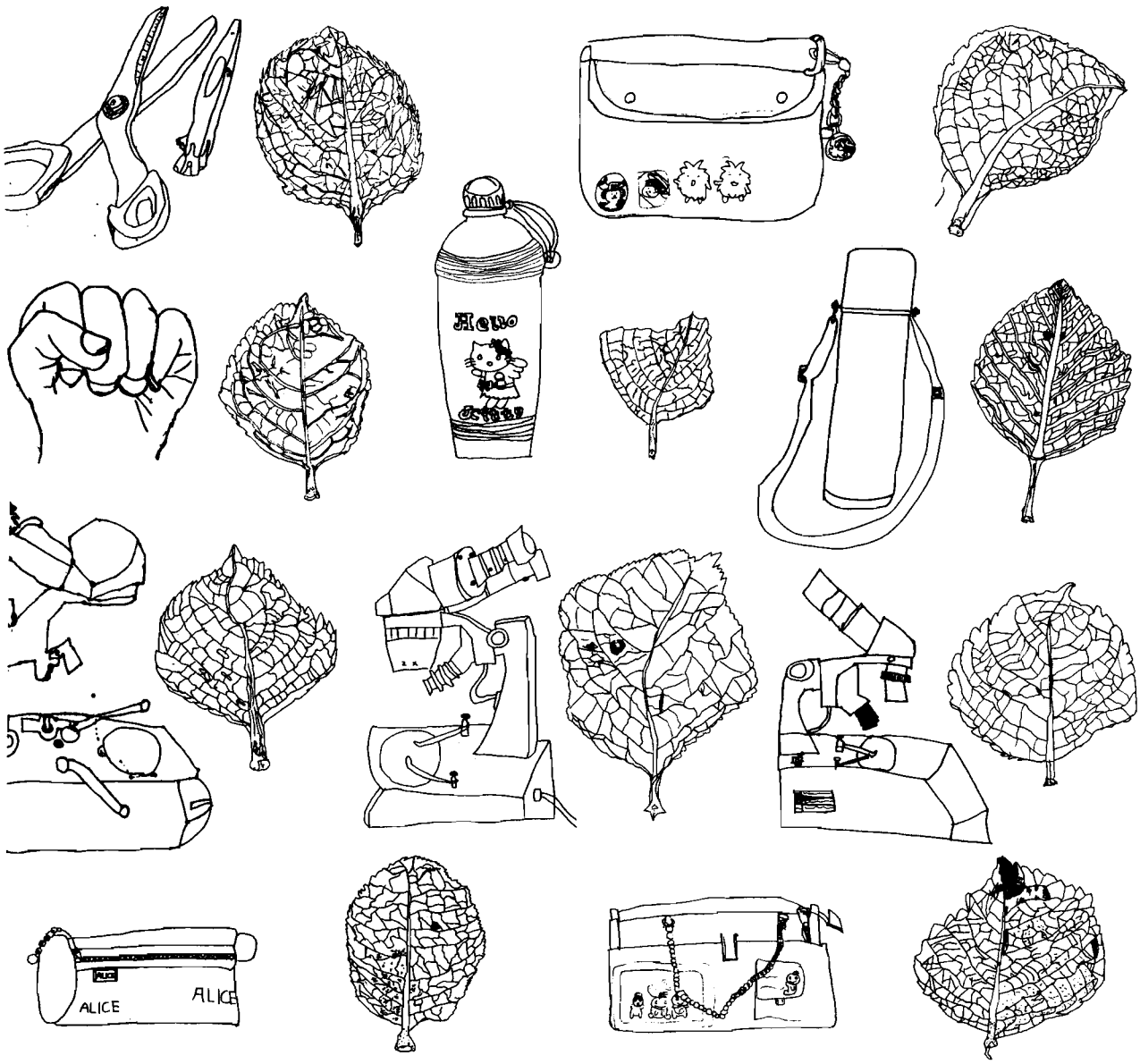

図4　児童のクロッキーの変化（5年）　※それぞれの右側がキミ子方式

さくらといちょうとおかしをかきました。あなやせんなどよくかけたと思いました。すごく楽しかったです。とくにいちょうが一番でした。ほかのものも書きたいと思いました。

- まずいちょうをかきました。くきからじゅんばんにかきました。むずかしかったです。つぎはおかしをかきました。われめからかきはじめました。いちょうよりじょうずにかけました。さいごはさくらのはっぱでした。むしくいをくふうしました。じょうずになってうれしかったです。
- さいしょにいちょうのはっぱをかきました。さいしょはかんたんだとおもったらけっこうむずかしかったです。つぎにおかしをかきました。すごくかんたんだと思ったら，中のせんがいっぱいあってむずかしかったけど，ちょっとおもしろかったです。
- いつもと書き方がちがうのでむずかしかったです。いちょうの葉はいつもは，りんかくから書いています。今日は，すじから書いたので，すっごくむずかしかったです。さくらの葉もりんかくから書きます。かめ山先生が，「今日は，すじから書きますよー。」と言ったとき，「えぇー。」と思いました。しんけんにしんけんに書いたけど，やっぱりむずかしかったです。でも，すっごくすっごく楽しかったです。
- いつもちがうかきかたをしてたのですっごくかきにくかった。先生が「下からかくよ」といったのでぼくは，「どんなふうにかくのかなぁ」といいました。いざかいてみるとけっこうかくのがむずかしかったです。でもなれてきたらかんたんになりました。
- まず，いちょうを書きました。ねもとの方から書きました。一番がんばった所はせんです。数をかぞえ

てやって行きました。つぎにはっぱのパイを書きました。その中では，さとうの所を1つぶ1つぶ書くところです。さいごにさくら（の）はっぱを書きました。その中でも一番がんばったのは，こまかいすじをていねいにかいた所です。今日のクロッキーでわかった事は，目にみえているものは書く，ないものはかかない。すごく上手に書けてほんとうに『うれしかったです。』

こうした感想文を読むと，子どもは大人のように上手に描きたいと内心は願っていることがわかる。また，子どもたちは「難しい」と感じながらも，（場合によっては，それは「面倒」と同義であることも多いのだが）同時に満足感や達成感を感じていることが読み取れる。しかし残念なことに，楽しさを味わえなかった児童もいた。

- 今日いがいは，はじめをすきなところから書いていたけどきまっていたのでむずかしかったです。

常磐南小の教諭たちは一度の現職教育で5題材を経験しているとは言え，児童らにしてみれば，一度に3題材は多過ぎであったと思われる。キミ子方式では，教える人の都合ではなく，描く人の都合に合わせることに留意したい。それから「どこでやめても立派な作品」になるよう部分部分を完成させていくことが描き方のコツである[9]。

紙幅の都合上，部分的且つ断片的になるが4，5年生の感想文も紹介する。

（4年）

- できたしゅんかんのきもちは，ことばで，いいあらわせないぐらいうれしかったです。
- 今までは，こんなふうにしんけんにかかなかったけど，今日はじめてしんけん（に）かけてよかったと思った。
- もういやだと思ったけど，こまかい線を書きおわったらうれしかったです。
- せんのこまかいところがこまかくてかきにくかったけど楽しかった。
- わたしは，いつも絵をかくときにりんかくけど今日かいた絵は中の方からかいたからうまく上手にできた。今日かいたやりかたでこれからも中の方からていねいにかいていきたいです。

（5年）

- ぼくは，いつもはっぱを書くのはにがてだったけどキミ子式で書いたらすごくうまくかけました。
- とてもやりにくかったです。私にとってはりんかくのがやりやすかったです。
- 自分でもいつもより上手にできたと思いました。はっぱは，いろいろなせんがあってむずかしかったけどやってみてよかったと思いました。
- 今までに発見しなかったことなどが絵をじっくりかいて発見しました。
- いつも絵をかいているより楽しかったです。
- キミ子式は，別に，むずかしくなくてかんたんにできたので，すごく良かったです。きっちりできて自分の作品じゃないくらいおどろきました。
- 今日かいたクロッキーはしっかり描き方があって，いつも以上にすっごく上手に書けました。私はいつものクロッキーが苦手でした。どうしても，思いどおりに書けなくて，いつもローカ（廊下）にかざることがはずかしく，いつもいやに思っていました。これからのクロッキーは，楽しく，はずかしいと思わずじしんをもって書けると思います。
- みんなもすごくうまくかけるようになっていてびっくりしました。
- 自分でもまんぞくしたから良かったです。

4．絵を通して何を学ばせるのか

今日の図画工作科の教科書を見ると，「アート尽し」の感がある。確かに図工という教科は絵画の領域だけで成り立っているものではないが，現代的な造形活動を児童にも体験させることばかりが本当に望ましいものなのだろうか。

前稿において筆者は，養老孟司の「個性」についての考え方や，板倉聖宣による教育と束縛に関する彼の文章を引きながら，「個性的で自由な表現」を教育目標にすることや，「創造性」や「感性」を評価に組み込むことの矛盾や危険性，指導者の個人的で趣味的な主観と「合う」「合わない」といった差別的要素を排除しきれない問題点などについて指摘した[10]。

創造性や個性を発揮させることを目的に，自由に絵を描かせることが重要なのではなく，キミ子方式のようにモノの見方や描き方を教え，自由に絵が描けるように育てていくための系統的且つ具体的な教育方法もときには必要ではないかと思うのである。見た目の派手さや新しさに何の教育的意義があるのだろう。児童らのクロッキー作品は同じ題材を描いても，そこには真摯にモノを見，理解し，そして写し取ろうとした一人ひとりの個性が既に存在しているように思われてならない。

絵画指導を通して子どもたちに学んでほしいことは，集中する時間の楽しさであると筆者は考えている。「描いているときは苦しいけれど…」というのは，絵を描く時間を楽しんだり，没頭したりしているのとは違う。「どのようにしたら子どもたちに楽しく絵を描かせられるか」について教師自ら体験しつつ学ぶことが大切ではないだろうか。

何も全ての絵画指導がキミ子方式でなくてはならない，というものではなく，絵を楽しく描けるようにな

るための入門教育として捉えたら良いだろう。

松本一郎は，キミ子方式の「卒業の時期」について，次のように言っている。

> 元々，絵の苦手な人が，キミ子方式で絵を描いて，一つ一つ描いていき，描き方を通して，自分に大事なことはなにかを探していく。そして，最終的には＜絵を描くって楽しいな＞と思ってもらい＜自分もステキだな＞と自分の良さに気づいたら，苦手でなくなっている時だと思う。それが，卒業の時だ[11]。

大人は簡単に「感性」や「絵心」などという言葉を口にして，絵が描けるということを才能のせいにするが，少なくとも，授業中に放っておいても絵の描ける子（いわゆる感性の豊かな子，絵心のある子）を基準にした授業の組み立てや評価の在り方は避けなければならない。出来なかった子が出来るようになってこそ，教育的な支援がなされたと言える筈である。それは何も図画工作科に限らず，他教科でも同じようなことが言えるのではあるが。

お わ り に

わかりたいことがわからないときの心の状態は，子どもでも苦しいものである。逆を言えば，わかりたかったことがわかれば出来る（だろう）し，出来るようになればもっと楽しくなっていくだろう。

最初から「自由に描きなさい」というだけの指導は，実は何も教えていないのに等しいほど罪深いやり方なのだと言える。もし絵の描き方がわからずに苦しんでいる子どもがいたら，教えてやるか，一緒に考えながら助けてやれば良いではないか。「絵は自分で考えるもの」「絵には決まった描き方はないから教えられない」と言う人は，実はその本人が描き方も教え方も，絵の楽しみ方さえも知らないために，本当は教えられないのではないだろうか。

2章で紹介したある教諭の感想に「描く対象物の成り立ち等をさらに一層学習しないといけない」と書かしめたキミ子方式は，教える側の人が「学ぶ人」に変わる機会を与えた，ともとれる。子どもを変えようとしたら，まず大人（教師）から変わることが先決なのだろう。

> 私は，教師に求められる第一の資格は，教える技術や能力でなく，学ぶ能力だと思っています。（中略）自分で変わろうとしないで，子供にだけ変わることを求める ―― これが教師の原罪だとこのごろつくづく思います。私は授業と言うものも，教師と子供が一緒に生きる場にならなければならないと考え始めました。そういうものとして授業をとらえ直すことが，学校がいままでの教育の方向を転換するきっかけになるんじゃないか，私はそんなふうに思います[12]。

とは，林竹二の言葉である。

常磐南小の教諭たちが，現職教育の場でまず自らキミ子方式のペン画の描き方を学び，個々に大切な何かを探し，変わり，そうして児童たちとともに一緒に生きる場をつくり出していったことは，作品と感想文からも明らかであり，評価できる。

教える側の教師が学ぶことなくして，教育改善なぞ所詮「絵に描いた餅」に過ぎないであろう。

注

1) 松本キミ子，カット・スケッチの描き方，仮説社，1999，p.6-7
2) 『新明解国語辞典 第三版』（三省堂，1985）によれば「短時間に鉛筆やコンテで写生した絵。速写画。」とあり，クロッキーの道具を制約している辞書もあることはある。
3) 前掲書『カット・スケッチの描き方』p.6
4) 松本キミ子，「キミ子方式の3つの約束」『三原色のフィールドノート（全6巻）』，山海堂，1995，p.3
5) 前掲書『カット・スケッチの描き方』pp.3-6
6) 同上，p.10
7) 美術の授業研究会『キミ子方式通信講座 中級・手引き書』（キミコ・プラン・ドゥ，1990，pp.24-33）に「髪の毛」「似顔絵」の描き方があるが，道具としては鉛筆のほかシャープペンシル，ボールペン，サインペンが示されている。また，松本キミ子『宇宙のものみんな描いちゃおう』（太郎次郎社，1987，p.132）に「室内の道具では，タワシ，ホウキは，えんぴつだけで描く」とあるが，これらの題材は絵の具で描くことよりも，線の集積を楽しむための道具として鉛筆などが挙げられていると思われる。
8) 松本キミ子『絵のかけない子は私の教師』（仮説社，1982，p.32）では「変化しないもの，成長しないもの，工場で作られるものは輪郭線を描く」とある。
9) 松本キミ子，キミ子方式スケッチ入門，JTB，2001，p.15
10) 松本昭彦，キミ子方式と大学生，愛知教育大学教育実践総合センター紀要　8，2005，pp.189-196
11) 松本一郎「価値の基準が変わる」『くらしと教育をつなぐWe』103号，フェミックス，2002，p.52
12) 林竹二・灰谷健次郎，教えることと学ぶこと，小学館，1986，p.36